

亡くなってしまう人と出会った

ユーモアたっぷりなエッセイもある梯さんだが、ノンフィクション作品はすでに世を去った人をテーマにすることが多い。今を見ることも大切だが、過去を知ること、知ろうとすることも大事。過去に遡ることで初めてわかること、感じることは。

ノンフィクション作家

梯 久美子

●かけはし・くみこ 1961年熊本生まれ
札幌育ち。主な著書に『散るぞ悲しき 硫黄島
総指揮官・栗林忠道』『狂うひと―
『死の棘』の妻・島尾ミホ』（ともに新潮
文庫）、『原民喜―死と愛と孤独の肖像』
（岩波新書）。近著に『サガレン 樺太/
サハリン 境界を旅する』（KADOKAWA）。

本屋さんは鍵っ子の居場所

私は三人姉妹の末っ子で、家族の中で熱心に本を読むのは私だけという環境でした。小学校時代、母も働いていた、いわゆる鍵っ子で、学校から家に帰っても一人。その一人である寂しさを埋めてくれたのが本でした。当時の私にとって、本は友達

のような存在。家には百科事典くらいしか本がなかったので、学校の図書室で借りて読むことがほとんどでした。

たまに親が連れて行ってくれた本屋さんでは、迷いに迷い、本当に厳選して本を買ってもらいました。イギリスの男の子は寄宿舎に入るとき、一緒に寝るためのテディベアを家から持っていくといいますが、私も本

を寢床に持ち込んでいました。せつかく買ってもらえる本は単に面白いだけでなく、何度も繰り返し読めるものでなければならなかったのです。当時読んだ本の表紙の手ざわりや、見返しの紙、挿絵などを、いまだに覚えています。中身、つまりテキストだけでなく、ものとしての存在感も、子どもの頃の私にはとても大切だったんですね。

吉本隆明さんの本の聞き書きを担当したことがあるのですが、気質として引きこもりがちで、子どもの頃から人と接するのが苦手だったとおっしゃっていました。かといって人と一切関わらないのは寂しい。救いは近所のお祭りや銭湯だったそうです。直接話すことがなくても、人の気配があり、明るい雰囲気もあるからね、と。

それに近いものが私にもあったと思います。学校ではクラス委員をやったりして快活にふるまっていたのですが、本当はかなりの引っこみ思案。でも、家に一人にいるばかりでは寂しい。その点、本屋さんは人の気配があり、しかも誰かと話さなくてもいい。内気な少女には、家と世間との中間にある、ちょうどいい居場所だったと思います。

だから小さい本屋さんよりも、大

きな本屋さんがよかったですね。一時間いても、二時間いても、別に変に思われない。幸い小学校のとき、家の近くに大きな本屋さんが出てきてよく通いました。棚の配置を今でもよく覚えています。それくらい大事な場所だったんです。

文が寺山修司さん、装幀が宇野亜喜良さんの『フォアレディースシリーズ』（新書館）が並んでいる棚が大好きです。『フォアレディース』のお気に入りです、長いこと立ち読みしていました。『フォアレディースシリーズ』には、全国の同世代の子たちが応募して選ばれた詩が載っていました。札幌は大きな街ですが、やはり、中央、とは遠く離れている感じを持っていました。ですが、その棚の前に行くと、投稿することで別な世界とつながることができるのだと感じていました。シリーズが並ぶ棚は、地方の文学少女と憧れの世界と

をつなぐ窓のようなものでしたね。

死者たちの厳しい目

最初の著作（『散るぞ悲しき 硫黄島総指揮官・栗林忠道』）ですが、まさか自分が戦争の話を書くことになるなどとは思っていませんでした。栗林中将を書ききつかけは、作家の丸山健二さんの言葉でした。『アエラ』の「現代の肖像」のため、長期にわたって丸山さんに取材をしたとき、「硫黄島の栗林中将を知っていますか？」と尋ねられ、「知りません」と答えたら、「梯さんみたいな人が彼を書いたら面白いんじゃないかな」とおっしゃったんです。

それまで戦争ものは読んだことがなく、戦争映画で唯一観たのもデートで行った『7月4日に生まれて』だけ。ベトナム戦争を描いた作品で